

筑波大学留学生センター日本語教育スタンダード 「話す」の構築に向けて

関崎 博紀 小林 真紀子 ボイクマン 総子 杉浦 千里
長戸 三成子 堀 恵子 ブッシュネル ケード

要 旨

本稿では、筑波大学留学生センター日本語教育スタンダード「話す」の構築に向けて、現在の「話す」コースにおける各授業の取り組みを概観する。まず、本学における「話す」スタンダードの方向性を確認する。次に、2010年度に再構成された各クラスの目標や取り組みと、2011年度1学期における変更点及び、今後への見通しを示す。最後に、スタンダード構築のために必要な課題を挙げる。

【キーワード】 「話す」スタンダード、アカデミック、論理的思考力、口頭表現能力

Toward the Construction of Tsukuba Japanese Language Education Standards for Speaking Classes

SEKIZAKI Hironori, KOBAYASHI Makiko, BUCEKMANN Fusako,
SUGIURA Chisato, NAGATO Minako, HORI Keiko, BUSHNELL Cade

【Abstract】 This article provides an over-view of the “speaking” classes at the International Student Center at the University of Tsukuba. The purpose is to confirm the direction for and further problems involved in constructing Tsukuba Japanese Language Education Standards. At first, we have a brief look at other standards, and confirm the direction of our standards. Secondly, we provide summaries of 5 classes from the view point of class goals, activities, and what was done in the 1st trimester, 2011. Finally, a number of pending issues are considered.

【Keywords】 “Speaking” standards, academic Japanese, logical thinking, oral proficiency

1. はじめに

本稿では、筑波大学留学生センター日本語教育スタンダード「話す」(以下、「話す」スタンダードとする)の構築に向けて、現在の「話す」コースにおける各授業を概観し、今後の課題を示す。ここで言うスタンダードとは、学生の日本語力を規定する基準、到達目標を、技能ごとにまとめたスケールを指す。スタンダード構築の直接の契機となったのは、補講コースの受講者数の増加にともなうクラス数の増加である。筑波大学留学生センターで開講している補講は、従来J100からJ700までの7レベルであったが、2010年4月より、J100からJ900という9レベルに分かれた。中上級の技能別クラス(文法、話す、聞く、読む、書く、漢字)に限って言えば、J500からJ700の3レベルであったものを、J500からJ900の5レベルに分けた。レベルの細分化に際し、各レベルにおける教育の内容を再構成する必要が生じた。これを契機として、900レベル修了時にできるようになることを定め、それに向けて各レベルのクラスにおける到達目標が段階的になるように再構成し、それを学習者に明示することで、目標を明確に意識しながら学習することが可能になる体制を築くことを目指している。

「話す」スタンダード全体の方向性は、アカデミックな場面における口頭表現能力及び論理的思考力の養成にある。それは受講生の大半が研究生・大学院生であり研究を志して来日していることを鑑みると、アカデミックな口頭表現能力、及びアカデミックな場で表現するにふさわしい内容を考える力の向上を手助けすることが急務だからである²。各レベルで何ができるようになることが目標なのか、そのレベルを修了した場合には何ができるのか、ということが明示的になるように、各レベルの学習目標はCan-do-statement³方式で記述していく方向で検討している⁴。

以下、2節では「話す」技能に関連した各スタンダードを概観し、本学留学生センターにおける「話す」スタンダード構築に向けての方向性を確認する。3節においては、2010年度に開講された「話す」の授業概要を示す。また、2011年度の担当者も交えて、2011年度1学期の取り組み及び、今後の更なる整備のための所見を述べる。なお、筑波大学は、現在は3学期制(10週間×3学期)を実施しているが、2013年度より2学期制(15週間×2学期)に移行する予定である。留学生センターの補講も、受講生の便宜のために、全学の方針に合わせて体制を変更することを検討している。そこで、今後の整備の見通しについては、15週の授業回数への移行した場合に、どのような授業が展開できるかを中心に述べる。最後に、4節では今後の課題をまとめる。3節の執筆は、3.1については、小林とボイクマン、3.2については杉浦、3.3については長戸、3.4については堀と関崎、3.5については関崎とブッシュネルが分担して行った。その他の節は、特に記載のない場合、本節も含め、小林、ボイクマン、杉浦、堀、関崎による議論を関崎がまとめた。

2. 「話す」技能に関連したスタンダードの概観と「話す」スタンダードの方向性

話す技能に関するスタンダードは、The ACTFL Proficiency guidelines⁵、The ALTE framework⁶、CEFR (Council of Europe、吉島・大橋訳 2004)、JF日本語教育スタンダード (独立行政法人国際交流基金 2010)、JLC日本語スタンダード (東京外国語大学 2009、2011) 等に見られる。このうち、アカデミックな場面における言語使用に関する記述が見られるのは、CEFR、JF日本語教育スタンダード、JLC日本語スタンダードである。

CEFR (Common European Framework of Reference for Languages) は、欧州評議会の言語教育に対する方針に基づき、「ヨーロッパの言語教育のシラバス、カリキュラムのガイドライン、試験、教科書、等々の向上のための一般的基盤を与えること」を目的とした、ヨーロッパの言語学習・教育・評価のための枠組を指す。そこでは、言語学習者が言語をコミュニケーションのために使用するためには何を学ぶ必要があるか、効果的に行動できるようになるためには、どんな知識と技能を身につければよいかを総合的に記述されている (Council of Europe、吉島・大橋訳 2004 : 1)。学習者の言語能力は、共通参照レベルとそのレベルに対応して尺度化されている例示的能力記述文によって表され、言語能力の熟達度 (language proficiency) に応じて言語使用者／学習者がどのような課題を遂行できるかが描かれている (Council of Europe、吉島・大橋訳 2004 : 21-43)。共通参照レベルは、A1～C2の6段階であり、Aレベルは、基礎段階の言語使用者、Bレベルは自立した言語使用者、Cレベルは熟達した言語使用者である。各レベルは2段階に枝分かれしている。また、例示的能力記述文は、言語使用のコンテキストやコミュニケーションのテーマ／課題／目的、言語活動の種類、方略、テキスト、言語使用者／学習者の能力として一般的能力とコミュニケーション能力など、広範にわたる観点を考慮して示されている。観点の中には、セミナー室という状況や、ディベートと議論という行為など、アカデミックな言語使用に関するものも含まれている。

日本語教育／学習のスタンダードには、JF日本語教育スタンダードがある。JF日本語教育スタンダードは、「日本語教育がますます多様化する今、教員養成・再研修、カリキュラムやコースのデザイン、教材開発などについて議論する際には、同じ言葉で語るための議論の基盤やよりどころ」となるものである (独立行政法人国際交流基金 2009 : 259)。そこでの能力記述文は、「CEFRの共通参照レベルというグローバルなものさしを使うことで多言語と比較できる仕組みを維持しながら、日本語教育関係者になじみのある用語を用いて教育現場に分かりやすい記述」として用意された (独立行政法人国際交流基金 2009 : 260)。

また、JLC日本語スタンダード (東京外国語大学 2009、2011) も、日本語教育／学習に関するスタンダードである。これは、「外国語としての日本語教育の基準」、「日本語学習5技能の5段階でのアカデミックな日本語能力達成基準」とされている。東京外国語大学留

学生日本語教育センターでは、JLC日本語スタンダードの開発に当たって、アカデミックジャパニーズを「大学等の勉学に直接的に必要な日本語」と捉え、その基準を「JLC日本語スタンダード」と規定した⁷。「話す」技能に関連するものとしては、独話を想定した「話す」と質疑応答やディスカッション等を想定した「聞く・話す」という活動に関して到達目標が記述されている。

以上に概観したように、いくつかのスタンダードが既に構築されている。そのうち、JLC日本語スタンダードは、日本語でアカデミックな場面での言語使用について、初級から上級までを5段階に区切って、各レベルにおける行動目標、スキル、言語的要素、テーマ・素材、教育活動が体系的に示されており、「話す」スタンダードを構築していく上で、非常に参考になる。ただし、本学の留学生センター補講受講者には、多様な学問分野における大学院生や大学院入学を目指す研究生が多い。到達目標を同じくすべきか否かについては、今後、受講生が知的活動としてどのようなことを行っているのかの調査を実施して確認をする必要がある。また、外部機関との連携を考えた場合、あるレベルの学習者がどの程度の能力を持っているのかということは、学内外に共通の物差しによって記述されることも必要である。しかも、その物差しはできるだけ汎用性が高いことが必要である。そこで、「話す」スタンダードに加えて、CEFRを外的基準として利用し、各レベルの学習者の口頭表現能力を示すことを試みた。CEFRを利用したのは、これが非常に汎用的で影響力が大きいため、外的基準としての役割を最もよく果たすと考えたからである。

3. 筑波大学留学生センター「話す」クラスの概観

以下、「話す」コースの各レベルの授業内容を示す。2010年度末までの当該レベルの授業概要を述べ、2011年度の取り組み及び、今後の発展性を記す（2009年度からの授業担当者は、表1のとおりである。）。また、上述したように、外部機関との連携を考慮し、当該レベルの受講生のレベルを、CEFRにあるCan-do statementを外的基準として示す。その際、クラスにおいて観察した学習者の様子を最もよく表しうると授業担当者が判断したCan-do statementを挙げる。なお、Can-do statementの翻訳は、国際交流基金による「みんなのCan-doサイト⁸」のCan-do statementリストに収納されているものを利用した。

表1 2009年度以降の「話す」クラスの授業担当者

レベル	2009年度	2010年度	2011年度
500	ボイクマン総子	ボイクマン総子(1学期)・小林真紀子	小林真紀子・石田麻実
600	杉浦千里	杉浦千里・ボイクマン総子(1学期)・長戸三成子	杉浦千里・長戸三成子・堀恵子
700	関崎博紀	杉浦千里・長戸三成子	杉浦千里・長戸三成子・堀恵子
800		関崎友愛(1学期)・堀恵子(2、3学期)	関崎博紀
900		関崎博紀	ブッシュネル ケード

(2011年10月5日現在)

3.1 J500話す

3.1.1 「J500話す」の目標

「J500話す」レベルは、初級文型の学習が終わり、初級から中級への移行期の学生を対象にしたクラスで、筑波大学留学生センター日本語補講コースの中級初期から前期に位置づけられている。2010年度の授業担当者は、習得段階別に言語行動目標が記載されている「JLC日本語スタンダード」⁹を参考にし、「話す」のカリキュラムを再検討した。

授業前のアンケートでは、大学での学習や研究発表の必要性から「発表」の能力を向上させたいと考える学習者が多いことがわかった。一方、日本でよりよい生活を送る上で、日常的なやり取りや日本人の友だちと話す際に思ったことを自分の言葉で表現できるようになりたい、「会話」の能力をもっと向上させたいという意見も多かった。

よって本授業は、週ごとに「発表」と「会話」を交互に組み込み、アカデミックな口頭能力と日常的な会話能力を向上するという設計にした。両者の到達目標設定は以下の通りである。

「発表」：身近なテーマについて、発表（3分程度）と質疑応答ができるようになる

- ・発表の表現を上手にを使って、構成を考えながら、話ができる
- ・キーワードを見せながら、相手にわかりやすく説明できる
- ・発表についてのQ&Aができる

「会話」：話し相手や状況に応じて、カジュアルな話し方、フォーマルな話し方ができるようになる。

3. 1. 2 授業概要とCEFRレベルとの対応付け

上述の到達目標が達成できるように、表2のシラバスを設計した。JLCスタンダード中級前半の行動目標、またCEFRのA2.1、A2.2に対応した授業内容となっている。さらに、2010年度1学期において、各レベルに配置された学生のレベルチェックのために作成した500レベルのCan-do statement (小林、ボイクマン) の一部 (10項目中6項目) は、関崎・酒井 (2011) におけるプレースメント・テストの結果とCan-do statementの回答結果との相関の分析に取り入れられているので、そちらを参照されたい。

表2 「J500話す」の授業内容

	■発表：身近なテーマについて発表 (3分) と質疑応答ができるようになる	■会話：カジュアル／フォーマルな話し方ができるようになる
(1)		Introduction：カジュアルとフォーマルの使い分け 第1課：自己紹介をする
(2)	第2課：私の国の紹介したい町 クラス発表練習	
(3)		第3課：予定の変更をお願いする
(4)	第4課：私の国の文化紹介：私の国の人にとって大切な○○ クラス発表1	
(5)		第5課：伝言をする
(6)	第6課：教育制度の比較 クラス発表2	
(7)		第7課：申し出る
(8)	第8課：私の国の社会問題 クラス発表3	
(9)	クラス発表4	
(10)	クラス発表5	期末会話テスト

まず、発表 (2、4、6、8課) として取り上げた内容は、主に文化的、社会的なトピックである。2課は、日本語で発表することに不慣れな学生も多いため、学習者自身がよく知っている身近な話題にした。発表の授業の目標の1つは、自身が話す内容について3～5つのキーワードを見せながら、相手にわかりやすく発表することであるが、これは、さらに上のレベルの目標である、レジュメやパワーポイントを使って発表ができるようになるための前段階の目標として位置づけられる。

活動の手順としては、①「聞く」：キーワードを見ながら教師のデモンストレーションを聞く。②「内容、構成確認」：どんな内容だったか簡単に確認後、もう一度スクリプトを見ながら聞く。その後、内容と構成、発表の表現や流れを確認する。③「グループで練

習」：宿題として、トピックに関連するQ&Aシートや、キーワードを書いてくる宿題を課している。クラスでは、キーワードを見せながらグループで発表させた。これは、ただ書いたスクリプトを読むだけの発表ではなく、宿題シートを基に自分の言葉で話せるように促すためである。最終課題としては（表2のクラス発表4&5）、一人ずつ自分の選んだトピック（4、6、8課の中から選択）で発表してもらった。

毎回の発表においては、話し手、聞き手、それぞれの役割を意識化させた。話し手については、「聞き手がわかるように話す」ことに重きを置いた。このレベルの学習者は、自身が使用する語句が聞き手にとって理解可能なレベルであるかどうかに対する配慮が少ないため、辞書で引いた難しい言葉を羅列したり聞き手が知らない言葉を使用したりして、聞き手が話の内容をわかっていなくても気にしないといった状況が頻繁に起こる。そこで、初回から難しい言葉を簡単な言葉に置き換える練習を行い、聞き手の理解に応じた話し方をするよう意識させた。聞き手の役割についても、「わからないときには、話し手をストップして質問する」よう指導したが、この質疑応答に関しては、学習者間で差が見られた。

次に、会話（3、5、7課の3機能）として取り上げた内容¹⁰について説明する。各回、話し相手や状況に応じて適切な話し方で話す練習を試みた。活動の手順としては、①「練習・実践1」：学習者がペアになり、場面とロール設定だけを与え、導入時の時点で自分が持っている実力で会話練習をして発表してもらい注意点を解説する。②「表現の確認」：初級文法の復習をしながら、自然なコミュニケーション能力の向上を目指すために重要な表現、また話し言葉特有のくだけた言い方を学ぶ。③「練習・実践2・振り返り」：②で導入した表現をうまく使って、もう一度似た内容設定でロールプレイをし、何組かに発表してもらう。その後、注意点の解説をし、各自ロールプレイの振り返りをする。表現例や会話例を導入する前に、まずロールプレイをさせたことは、既習の日本語の表現を使いこなせないことと、自分に何が足りないのかを気づかせるためにも効果的であった。

授業内容は、前述したようにJLCスタンダード中級前半の行動目標、及び、CEFRのA2.1、A2.2に対応したものとなっている。学期終了時の学習者の能力をCEFRの基準に照らし合わせ、到達の有無を見てみると、以下のことが言える。特に学習者の産出能力、語用能力の点で達成できていた。「手持ちの語彙の中から不適切な言葉を使っても、言いたいことをはっきりとさせるためにジェスチャーを使うことができる。」（言語活動：方略、カテゴリー：産出、レベル：A2.2）、「限られた範囲でだが、語彙的な差し替えを行って、充分練習した、覚えている言い回しを使って特定の状況に合わせるができる。」（言語活動：語用能力、カテゴリー：柔軟性（ディスコース能力）、レベル：A2.2）これは、難しい言葉の言い換え練習の成果だと思われる。

しかし、「非常に限られたレパートリーの、学習・練習済みの単語や言い回しなら、当人の言語を聞き慣れている母語話者であれば、多少努力すれば理解できる。」（言語活動：

言語構造能力、カテゴリー：音素の把握、レベル：A1)、「それらをうまく結びつけることはできなくても、特定の具体的な状況に関して、基本的な単語や言い回しのレパートリーを持っている。」(言語活動：言語構造的な能力、カテゴリー：使用語彙領域、レベル：A1)、「学習済みのレパートリーについて、いくつかの限られた単純な文法構造や構文を使うことができる。」(言語活動：言語構造的な能力、カテゴリー：文法的正確さ、レベル：A1)など、言語構造能力においては学習者間で差異が見られた。つまり、「相手にわかりやすく説明できる」という到達目標は産出や語用能力の点ではおおむね到達できていたと言えるだろうが、言語構造能力の点では、学習者によって到達度に関きがあったと言える。発表の活動では、質疑応答が活発に行われる場合とそうでない場合があったが、それは、発表者の発音が不明瞭なことや聞き手の話の内容の理解度にもよると考えられる。今後、教師側もこういった質疑応答がうまくいかない要因を意識し、授業での更なる工夫と働きかけをする必要がある。

3.1.3 今後の授業展開とまとめ

2学期制への移行を考慮した上で、今後の授業展開として挙げられるのは、発表における活動をもっと掘り下げて取り組むということである。具体的には、まず、発表の時間を2回の授業に分け、発表の準備作業として1回目に、①教師によるデモンストレーション、②内容・構成確認、③定型表現を使い、順序立てて話せるような重要表現の導入、④聞いた内容のキーワードを書き、それを基にミニ発表をする、⑤他に似たような状況を与えてミニ発表をする、といった活動を行い、次の授業には、自分が考えた内容で発表をするという授業構成に変更する。

さらに、上述した「発音や話の内容が理解できない」という要因を改善するために、聞き手の活動の充実化を図りたい。例えば、聞いた話の内容を簡単にまとめて書かせたり、わからなかった言葉を集めて話し手にフィードバックしたりするような活動が考えられる。これまでの授業でも、話し手となった学習者には、聞き手がわからない言葉は簡単な言葉に言い換えて説明するようにと指導している。しかし、必ずしも全員がそれを自覚的に実行しているわけではない。そこで上述のような聞き手の活動を活発にし、聞き手からのフィードバックをもらうという活動を加えることによって、話し手となった学習者は、相手に自分の話の何が伝わって何が伝わらなかったのか、それは内容面の問題か、または語彙や発音の問題なのかといった自分の発話の問題点を直接知ることができるのではないかと。そしてそれはすなわち、聞き手の理解を気にかけてながら話す態度を養成することにつながるのではないかと思う。同時に、聞き手としての役割を意識的に行うというこの活動は、自分が話し手になったときに相手にわかりやすく話をするということを自覚させることができるのではないかと考えられる。このような活動を通して、JLCスタンダード中級前半のス

キルの項目にある、自分の話し方（イントネーション、プロミネンス、スピードなど）をモニターしながら話すという能力を養成したいと考えている。

教師は、CEFRの方略（表現できないことを他の方法で補う、説明を求める、表現方法を変える）に関する問題が起こったときには、即座にその場でフィードバックするよう心がけたい。また、学習者が話し手、聞き手、双方の役割を果たす中で自分自身の取り組むべき課題に気づき、常に自己の発話をモニターする態度が養えるような授業を、日々改善を加えながら行っていきたいと考えている。

3.2 J600, 700話す

本クラスは、それぞれ中級中期、中級後期と位置付けられている。筆者は2007年度以降現在の「J700話す」に相当するクラスを担当し教材開発を進めてきたが、クラスが細分化されるに伴って「J600話す」が新設されたため、「J700話す」の前段階として教材開発を行った。授業設計や目標など不可分な箇所が多いため、本稿ではこの二つのレベルを合わせて述べることにする。

ここでは本クラスに関する記述を行う。CEFRとの関連付けは3.3を参照されたい。

3.2.1 「J600, 700話す」の目標

この「話す」コース全体としての最終目標は設定されていないが、著者は「大学生生活、研究活動の場で求められる発表、質疑応答、討論が十分に行える」ことを最終目標とし、「J700話す」ではそこに到達するための前段階、「J600話す」ではさらにもう一段階下げた目標設定を行った。

「J600話す」の目標は次の通りである。

- ①発表のメモを使って、わかりやすい発表ができる
- ②社会性のあるテーマについて、簡単な日本語で話すことができる
- ③広く社会に興味・関心を持つ
- ④相互に理解可能な質疑応答ができる
- ⑤「話す」力を伸ばすための具体的な目標を自分で設定し、実施した後、自己評価する
- ⑥日本語で簡単なインタビューができる。その結果を他の人に伝えることができる。

「J700話す」の目標は次の通りである。

- ①レジュメを効果的に使い、大学生生活で必要とされる発表ができる
- ②社会性のあるテーマについて討論ができる
- ③広く社会状況に興味・関心を持ち、日本語で情報が取れる
- ④相手に配慮した相互に理解可能なコミュニケーションができる（相手が知らないことをわかりやすい日本語で説明できる。自分がわからないことを表明し、解決できる）
- ⑤「話す」力を伸ばすための具体的な目標を自分で設定し、実施した後、自己評価する

3.2.2 授業設計と授業概要

「J600話す」と「J700話す」の授業設計の基本構造は同一である。全10回の授業の前半6回で発表、質疑応答、討論の練習を行う。同時に宿題としてインタビューを行ったり、自分でニュースリソースにあたるなどして、社会全般についての知識を蓄え、討論の材料や発表のテーマ探しに役立てることを狙った。後半の4回ではグループ発表を行う。発表や

表3 「J600話す」授業内容

回	内容
1	1. オリエンテーション 2. 全員インタビュー 3. インタビュー練習
2	1. ミニ発表 Step1 発表メモ→発表 / Step2 上手に質問! / (Step3 グループでの話し合い)
3	1. 言葉の言い換え練習 2. ミニ発表「日本人へのインタビュー」 Step1 上手に質問! / Step2 グループでの話し合い
4	1. 言葉の言い換え練習 2. ミニ発表「日本人へのインタビュー」 Step1 上手に質問! / Step2 上手に質問+α / Step3 グループでの話し合い
5	1. 言葉の言い換え練習 2. ミニ発表「日本人へのインタビュー」 Step1 質疑応答 / Step2 グループでの話し合い
6	1. 「今日の私」中間確認 2. 発表準備・評価表作成・聞き手への宿題 3. 司会の言葉、発表の言葉
7	グループ発表と質疑応答1 聞き手への宿題
8	グループ発表と質疑応答2 聞き手への宿題
9	グループ発表と質疑応答3 聞き手への宿題
10	グループ発表と質疑応答4 まとめ、レジュメの直し、振り返り

表4 「J700話す」授業内容

回	内容
1	オリエンテーション 相互理解活動 ミニ討論準備
2	ミニ討論1「私の日本語問題」 宿題報告→討論 インタビュー練習「最近の気になるニュース・社会問題」

3	意見を言う・意見を聞く練習 発表の日本語練習 ミニ討論2「最近の気になるニュース・社会問題」 インタビュー報告→討論
4	言葉の言い換え練習 司会の日本語練習 ミニ討論3「私が最近、気になるニュース」 宿題報告→討論 グループ発表と討論の準備 グループ分け
5	言葉の言い換え練習 「困ったときは簡単日本語」 グラフの説明練習 発表準備
6	グループ発表と討論1 「みんなと考えたい疑問に思うこと」/「みんなと考えたい社会問題」
7	グループ発表と討論2
8	グループ発表と討論3
9	グループ発表と討論4
10	まとめ レジュメの直し 振り返り

質疑応答、討論の精度を高めることと同程度に、終了後の検討会に時間をかけ、良い発表・討論をするためには何が必要かをクラス全体で考え、意識化させることに重きを置いた。

紙幅の関係上、授業活動を詳述することは避ける。詳しくは別稿を参照されたい¹⁾。

授業活動の特色として、次の7点が上げられる。

①活動の難易度が段階を追っている

「J600話す」2～5回目のミニ発表を例にとって説明したい。まず、3～4人の小グループになり、宿題として行ってきたインタビュー結果についての発表と簡単な質疑応答をする。次にその中からおもしろいものを1つ選んで全員の前で発表し、質疑応答を行う。これを4回にわたって練習することで、最終発表の時にはある程度の自信を持って行うことができるようになる。テーマも身近で具体的なものから、社会的、抽象的なものに段階的に配置した。

②与えられるのではなく自ら探し当てる

討論の練習を行う場合、あらかじめ教師が用意したテーマや資料を使うことが一般的だが、本クラスでは学習者が自分でそれを見つけ、クラスに持ち込むことを取り入れた。「600話す」レベルで日本語の生資料にあたるのが難しい場合はまず、同国人先輩学習者や日本人にインタビューを行ってその結果を発表するところから始める。能動的に学習に関わることと、今後、学習者が研究生活を行う上で不可欠な、テーマ設定の力を伸ばすことを意図している。

③授業内容と学生の現実を結ぶ・全体像を提示する

②もその一つであるが、授業を授業として終わらせるのではなく、学生の現実の生活や将来の展望と、今、授業で行っていることを明確に意識させる必要がある。本クラスでの授業活動や宿題はすべてそれを意識して作成し、全ての回の活動を一冊の教材¹²にまとめて授業の全体像を見通せるようにした。また、授業中にも機会があるごとに、授業活動が学生の現実の何に結び付いていくのか、その意図を明確に説明することを心がけている。

④継続的な自己観察が組み込まれている・個だけではなく共有する

冒頭に述べた「中級」の苦しい時期を乗り越えて成長を図るためには、継続的な自己観察とそれによる自己課題の設定、その検証と再設定という循環が欠かせない。そのため、授業開始時に自分の日本語の問題点と解決のための課題を設定すること、また、毎回授業終了時に「今日の私」として振り返りをメモしていくことを課している。中間時に再度クラスメイトとそれについて話し合い、最終レポートにはこれらを網羅して自己点検を図り、次の段階に進むように教材の中に組み込んだ。

⑤聞き手の役割の意識化

中級レベルの学生の質疑応答、討論が表層のレベルで終わってしまう一因に聞き手の役割の重要性が認識されていないことが上げられる。そこで「J600」ではまず「わからないことをわからないと表明する練習」「発表を聞きながら質問を作る練習」などをさせる。「J700」では質問の質を上げるために、最終発表担当者が事前にテーマに関する事柄を1つ「聞き手の宿題」として提示し、聞き手はそれについて調べておき、当日、より良い質問をする練習などをさせている。

⑥話すことと書くことの連動・それによる思考の構造化の練習

話すことが苦手という学習者は、その理由として、何をどの順番で話せばわかりやすく話せるかが分からないことを上げる。初級から受動的な学習を続けてきた結果であろう。そこで、「600話す」のミニ発表の際にはキーワードを3つ板書してから話すこと、最終発表ではメモ（レジュメの一段階前のもの）を作成しながら発表の構成を整えて話す練習を行った。「700話す」では一歩進んでグループで相談しながらレジュメを作成し、それに基づいて発表を行う。これを行うことで一つのテーマについて複眼的思考を経て構成を整える能力が養われる。

⑦「ことばの言い換え」の重視

自分でテーマを探さよになると、自分の日本語運用力を越えたものを選んでくるようになる。そのギャップを埋めて聞き手に理解可能な発表を行うためには、「言葉の言い換え」の発想と技術が欠かせない。

3. 2. 3 今後の課題

次の3点を今後の課題としたい。

①質問力を上げる

相手の話や発表を聞いて理解しながら、同時に自分の考えと照らし合わせながら質問を考えるのは中級の学習者には非常に難しいが、これなしに深い討論に進むことはできない。これを改善するために、一段階難易度を下げた質問力を上げるための具体的な練習方法を考える必要がある。

②発表の質を高める、討論を深める

客観的な資料に裏打ちされた発表や討論を行うために、資料の収集や説明の仕方などが必要になる。これに関しても具体的な練習方法を追加することが必要である。

③レベル間の調整、他技能との連携

「話す」コース全体を見渡してみると、テーマや活動内容の難易度の逆転現象がみられるので、調整を行うことが必要であろう。また、本コースの最終ゴールである「J900話す」の終了時レベルを明確にすることで、「J800話す」より下のクラスの活動を有機的に構築することができるようになると思われる。更に、「話す」の授業の中では扱いきれないレジュメやメモ、最終レポートの書き方に関して、「書く」クラスと連動することも視野に入れたい。

3. 3 J600、J700の授業概要とCEFRレベルとの対応付け

J600、J700は中級中期及び後期の学習者を対象に、前節の杉浦によって自主開発された教材¹³を用いて一貫した授業が行われている。本節では、その授業概要と学生の現状を踏まえ、外的基準であるCEFRとの対応付けを行う。

3. 3. 1 J600のCEFRレベル

J600の授業活動では、学習者が自らインタビューやその他のリソースを用いて情報収集をし、それをもとに小グループで発表と質疑応答を繰り返していく。そのような活動を通して、学習者は次第に「事実に基づく情報を見つけ出し、人に伝えることができる」（言語活動：やりとり、カテゴリー：情報交換する、レベル：B1.1）ようになると考えられる。

また、討論においてJ600が目標としているのは、「相互に理解可能な質疑応答ができる」（杉浦）¹⁴ ことであり、学習者がそれぞれに「別々の質問をするのではなくて、（前の人が出した）質問をよく聞いて、それに関係することを質問する」（杉浦）¹⁵ ように促す具体的な活動を通して、学習者の質問回数も増え、質問することを前提に聞く姿勢が徐々に養われていく。このようなことから、「誰かが言ったことの意味を明らかにするよう、詳しい説明を人に求めることができる」（言語活動：やりとり、カテゴリー：説明を求める、レベ

ル：B1) ようになり、更には「誰かが述べたことを部分的に繰り返して、互いの理解を確認することができ、それによって予定の方向に発想が展開するのに寄与できる」(言語活動：やりとり、カテゴリー：議論の展開に協力する、レベルB1.1)ことを努力目標として授業が進められている。

一方、学習者の発表材料に焦点を当てると、高度な語彙力が要求される社会的なテーマよりも日常生活に即したテーマが話題として選択されることが多く、学習者が関心のある事柄に関しては比較的流暢な発表もできることから、J600での話す練習を通して、概ね「身近で個人的関心のある事柄、または日常生活に関連する話題について個人的な意見を表明したり、情報を交換したりできる」(言語活動：やりとり、カテゴリー：口頭でのやりとり全般、レベル：B1.1)ようになると言える。但し、意見については、学習者によって理由を示して自分なりの意見が表明できる場合もあれば、情報の提示で終わってしまう場合もあり、「意見、計画、行動について短い理由や説明ができる」(言語活動：産出、カテゴリー：論述する、レベル：B1.1)という点では到達が期待されるレベルではあるが、まだ定着しているとは言えない。

以上のような点から、CEFRを用いてJ600のレベルを総合的に判断すると、B1.1程度に対応すると考えられる。

3.3.2 J700のCEFRレベル

J700もJ600に即した手順で授業は展開されていくが、J700では身近な話題から離れ、より「社会性のあるテーマについて討論できる」(杉浦)¹⁶ ようになることに重きを置いている。そのため討論の材料となるインタビューの題材も「最近の気になるニュース・社会問題」¹⁷に絞り、それぞれが持ち寄った様々なニュースに質疑応答をしながら、互いの意見を交換し、社会問題についての背景知識を増やしていくことができるようになっていく。このような点から、「自分の関心や専門分野に関連した、身近な日常のおよび非日常的な問題について、自信を持って話し合いをすることが出来る。情報を交換、チェックし、確認できる。あまり日常的でない状況にも対処し、問題の所在を説明できる」(言語活動：やりとり、カテゴリー：口頭でのやりとり全般、レベル：B1.2)や「短い物語、記事、スピーチ、討議、インタビュー、ドキュメンタリーをまとめ、自分の意見を示すことができる。またさらに細部に関する質問に答えることができる」(言語活動：やりとり、カテゴリー：情報交換する、レベル：B1.2)の項目内容がほぼ該当すると考えられる。

また、J700の教材では、話し手が収集した情報を聞き手に一方的に伝えるのではなく、「話す人も、聞く人も、わかる」(杉浦)¹⁸ことを特に重視している。そのため、話す題材となるニュースに出現するような抽象的で難解な表現を簡単な言葉に言い換えて、聞き手に分かるように説明する練習を多く取り入れている。その結果、多くの学習者が最終発表で

は「自分の言いたかったことを、類似の意味を持つ、簡単な言葉を修飾することで言い表す」(言語活動：産出、カテゴリー：表現できないことを他の方法で補う、レベル：B1.2)ことを意識的に行うようになる。

加えて、最終発表では「司会の日本語」「発表の日本語」¹⁹を適切に使用し、回を追うごとに聞き手の理解を意識した発表を心がけるようになっていくが、討論においては、互いの意見の表明にとどまることが多く、「意見、計画、行動について短い理由や説明ができる」(言語活動：産出、カテゴリー：論述する、レベル：B1.1)ものの、「明確な議論が構築でき、他人がついていくのに苦労しない」(言語活動：産出、カテゴリー：論述する、レベル：B1.2)というまでには及ばない。有意義な討論のためには、グループ内の意見の共通点・相違点を整理し、打開点を探ることが必要となってくるが、学習者が自ら「議論の中で合意点を要約し、その場の話を中心の合ったものにするように寄与できる」(言語活動：やりとり、カテゴリー：議論の展開に協力する、レベル：B1.2)ように指導していくことは今後のJ700レベルにおける課題であると考えられる。

以上のようなことから、J700レベルを総合的に判断するとCEFRのB1.1～B1.2にほぼ該当すると推測される。

3.4 J800話す

3.4.1 「J800話す」の目標

J800は、中級後半からスタートして上級の入り口に到達するレベルと位置づけ、大学生活に必要な口頭発表とディスカッションができることを目指す。

以下では、具体的な目標、シラバスと授業の概要、学期間での異同、2011年1学期の取り組みと終了時点での課題、2学期制移行への対応、CEFRとの対応付けについて述べる。

具体的な目標は次の3点とする。

- (1) 社会的な問題について、資料を示しながら論理的に説明できること
- (2) 準備をした上で、根拠のある意見を述べあうディスカッションができること
- (3) 物事を決定するためのディスカッションができること

以下、これらを目標とした理由や、狙いなどを説明する。

(1) 専門が違う学生がいるクラスの中で共通に議論し合えるテーマとして、また、話し慣れた身近なテーマからより一般的な話題に広げていくために、社会的な問題を選んだ。大学生活で必要とされる口頭能力を身につけるには、話題を論理的に展開する必要がある。それには自分の考えを述べるだけでなく、資料の要約をしたり、言い換えたり、例を挙げたりしながら、わかりやすく説明することが必要である。資料の扱い方としては、情報源を正しく引用できること、グラフ、図表など説明ができることが必要である。

(2) ディスカッションにおいては、(1)で見たように資料を準備し、それを根拠として論

理的に意見を述べる。また聞き手への配慮として、①前の発言との関連づけ、②自分の発言内容の提示、③自分の意見（質問）、という構成で発言できるようにする。

(3) 物事を決定するためのディスカッションでは、途中で調整を図りながら一つの結論に導くことが必要となるため、他者の意見を十分理解し、自己の発言を客観的に評価し、必要に応じた変更や、他者の合意を得ることなどを表現できなければならない。

3.4.2 「J800話す」の授業概要

これらの目標のために、活動としてはポスター発表、ディスカッション、口頭発表を行い、授業中に必要な表現の練習、発表後書き起こしを行い自ら訂正を加え、さらに教師からのフィードバックを受ける、自己評価、他者からの評価などを行った。授業内容は表5のとおりである。クラスの人数によって進め方は多少異なる。

表5 「J800話す」2010年度3学期授業内容

回	内容
(1)	オリエンテーション、口頭表現について考える、自己評価①
(2)	ポスター発表準備
(3)	ポスター発表、振り返り
(4)	ディスカッションに必要な表現、ディスカッション①：論点を決める
(5)	根拠となる資料の示し方
(6)	ディスカッション②：根拠のある意見を述べる、振り返り
(7)	最終発表準備、レジユメの書き方
(8)	最終発表前半
(9)	最終発表後半、要点を絞って話す
(10)	最終発表の振り返り、自己評価②

以下では、授業内容について概要を説明する。

①では到達目標を示し、各活動の関連性を理解させた後、Can-doリストを用いて口頭能力を自己評価させた。評価項目は授業の目標に連動した活動を取り上げている。コース終了時にも同じリストで評価させ、コース開始時と比較して学習成果を自ら確認できるようにしている。さらに、よい口頭発表、ディスカッションについてのブレンストーミングのあと、より具体的な自己目標を立てさせた。②ポスター発表を未経験の学習者も多いことから、ニュースを紹介し、そこからクラスのグループディスカッションのテーマとなる論点を挙げるポスター発表を行うための準備をする。ニュースの要約の仕方、引用の仕方、ポスターの書き方等について理解させる。③グループに分かれてポスター発表を行い、録

音、録画しながら、聞き手に評価させる。授業後録音を聞いて書き起こしをさせ、自己訂正を行うことによって表現形式への気づきを促す。④物事を決定するためのディスカッションに必要な表現等を学んだ後、グループで取り上げるニュースと論点を決めさせる。⑤意見を述べるディスカッションに備えて、グラフの説明の仕方を学び、発言の準備を行う。⑥意見を述べるディスカッションを行い、自分の考えがどう深まったかをまとめる。⑦学期中の活動をまとめ、最終発表に向けて構成を考え、レジュメを作成し、発表時の効果的な提示方法を学ぶ。⑧⑨は最終発表を行う。その後、1文の発話時間を意識し、発表時間にあわせた口頭発表へと応用できるような活動を行う。⑩最終発表の振り返り、偶発的な語彙学習のまとめをさせる。①と同じCan-doリストを用いてコース終了時の自己評価をさせ、来期の目標設定を行う。

以上では、3学期の活動を紹介したが、2010年度の学期による違いに触れておく。1学期²⁰では、授業の中で日本国内のいくつかの社会問題について触れる機会を与えたあと、グループワークとして日本の社会問題について日本人大学生を対象にアンケート調査、インタビュー調査を行い、その発表をさせた後、そのテーマについてグループディスカッションを行った。グループで調査をさせた理由は、調査の計画、実施、結果のまとめをすべてグループで協力して進めることで、発表内容を聞き手に伝えることに対する動機を高め、自ら行った調査結果から導かれた結果を「話したい」「伝えたい」という話すことへの意欲向上を狙うためであった。しかし、社会的な問題をテーマに選ばせることは容易でなく、どうしても個人的な問題をテーマにしてしまう傾向があり、テーマ設定の導き方に課題が残った。

2学期以降は、ニュースを情報源とするポスター発表を行い、グループで議論するテーマをその中から選ばせるようにした。ポスター発表を選んだ理由は、近年学会発表の一つのスタイルとして広く行われており、学生には口頭発表への前段階として奨励される傾向もあることから、口頭表現を学ぶに当たって必須であると考えたためである。その他の点においては、1学期の考え方、活動を踏襲して、発展させている。

3. 4. 3 2011年度における取組と今後の課題

2011年度1学期は、2010年度3学期の授業を概ね踏襲しつつ、若干の変更を加えて実施した。主な変更点は、次の3点である。1つ目は、「⑤根拠となる資料の示し方」を学習する前に、自分の意見、理由を整理する練習を取り入れたことである（例えば、「原子力発電は、_____ので、{いい/悪い} と思います。」という文を用いて、自分の立場を決め、その理由を述べさせた）。これは、ポスター発表及びその後の質疑応答において、自らの意見や理由が明確に述べられない学生が多く見受けられたためである。2つ目に、「⑤根拠となる資料の示し方」の中で、図表を説明する際に用いられる表現の練習を増やした。

3つ目に、それらを統合し、特定の問題について、意見～理由～根拠～意見/結論を述べる談話の練習を行ったことである。いずれも、「J900話す」における活動を見据えて取り入れた。しかしながら、2011年度1学期に残した課題もある。1つは、使える言語表現の量と正確さを向上させることである。それらを高めるように心がけたが、実際には、使い慣れた特定の表現を繰り返すにとどまる学生や、待遇表現、接続詞、音の変化などの点において不正確な言語使用が目立った。2つ目は、物事を多角的に捉えられるようにすることである。学生の中には、原子力発電の危険性のみを説明して「原発を廃止すべきである」と結論づけてしまう場合が少なくなかった。物事の長短や実現可能性、代替案の比較・検討をし、それを表現できるようにしたい。

そこで、今後、1学期15回の授業に移行した場合には、物事を多面的に捉え、それを表現する練習を取り入れたい。また、言語表現の量と正確さを高めるために、ディスカッションや発表の回数を増やしたい。自らの発話の書き起こしによる気づきと、教師からのフィードバックを得たうえで、正確な表現を練習する機会を増やすことが必要であると思われる。

3.4.4 外的基準 (CEFRレベル) との対応付け

「J800話す」の学生の口頭能力を、CEFRを外的基準として示すと、ほぼB1.2 (一部B2) に該当すると思われる。

クラスの初期に行うポスター発表において、ニュースの概要紹介とそれに対する自身の意見を提示する活動は、多くの学習者ができていた。このことは、「自分の関心のあるさまざまな話題のうちのどれかについて、ほどほどの流暢さで、ある程度の長さの、簡単な記述やプレゼンテーションができる。その際、事柄の提示は直線的である。」(言語活動：産出、カテゴリー：話すこと全般、レベル：B2.1)、「短い物語、記事、スピーチ、討議、インタビュー、ドキュメンタリーをまとめ、自分の意見を示すことができる。またさらに細部に関する質問に答えることができる。」(言語活動：やりとり、カテゴリー：情報交換する、レベル：B1.2)という記述によって表すことができると思われる。しかし、「いくつかの選択肢の利点と不利な点を挙げて、話題となる問題の視点を説明できる。」(言語活動：産出、カテゴリー：論述する、レベル：B2.1) や、「ほとんどの場合、明確な議論が構築でき、他人がついていくのに苦労しない。」(同B1.2) のように、明確に情報を整理して説明することには、上述の通り課題があるように思われる。また、ディスカッションにおいては、「誰かが述べたことを部分的に繰り返して、互いの理解を確認することができ、それによって予定の方向に発想が展開するのに寄与できる。他の人を話し合いに誘い入れることができる。」(言語活動：やりとり、カテゴリー：議論の展開に協力する、レベル：B1.1)は概ねできているが、「議論の中で合意点を要約し、その場の話を焦点の合ったものにするよう寄与できる。」(同、B1.2) ことになるのは、授業の目標である。今後の課題

でもある、物事を多角的に見て考えを深めることができるようになるために、「身近な範囲の議論なら、自分の理解したことを確認したり、他の人の発言を誘ったりして、議論の進展に寄与できる。」(同B2)ように、他人に意見を促してそれを聞きながら議論が進められるようになることが望まれる。

3.5 J900話す

3.5.1 「J900話す」の目標

「J900話す」は、「話す」コースでは最も上のレベルである。このクラスで養成を狙うのは、次の3つの能力、[1]論理的思考力・表現力、[2]明確に意図が伝わり、必要な情報を引き出す質問をする力、[3]協調的に発表を作りあげる力、である。

[1]の「論理的思考力・表現力」とは、主張・結論に対する理由・根拠、論拠をそれぞれ複数考え、論理構造が明確になるように表現できることを指す。特定の問題について、賛成/反対や今後の見通し等、自らの意見を持てること、その理由・根拠を述べられること、そして、理由・根拠、及びそれと主張の結合が妥当なものであることを支えるために、資料・データを論拠として用意できるようになることを目指す。冗長に話すのではなく、情報同士の関係を整理したうえで、必要な情報を過不足なく表現できなければならない。これは、口頭での表現はもちろん、説明の補助資料としてのレジュメにおいても求める。聞き手としては、語の意味や説明の内容の理解に加えて、論理を検証しながら聞く練習をする。論理の矛盾や不整合、情報の不足があった場合、聞き手は通常、それを埋め、相手の話をよりよく理解するための質問をする。ただし、ゼミや学会発表においては、通常、質疑応答に割ける時間に限りがある。そこで、[2]必要な情報が引き出せるような意図が明確に伝わる質問を限られた時間内に簡潔に述べられるようになる必要がある。[3]「協調的に発表を作りあげる力」の養成を狙うのは、分野によっては共同研究が盛んに行われており、総合大学である筑波大学の大学院課程に在籍・進学する場合に強く求められる受講生がいるからである。900レベルでは、互いに論理の不備、矛盾を確認しながら主張をまとめ上げることを目指す。

これら一連の能力を養成するための活動として、受講生をグループに分け、ディスカッション、ディベートを行った。以下、具体的なシラバスを見ながら、授業の実践を述べる。表6に、2010年度3学期(2010年12月～2011年3月)の授業内容を挙げる。

表6 「J900話す」2010年度3学期の授業内容

回	内容
(1)	オリエンテーション、自己紹介、他者紹介
(2)	普通体と丁寧体の区別、図表の説明の仕方
(3)	ディスカッション：「留学生受け入れのメリットとデメリット」 レジュメに載せるべき情報について
(4)	ディベート：「日本は留学生を積極的に受け入れるべきである」
(5)	振り返り：論理が追えるレジュメの作成
(6)	振り返り：情報同士の関係を整理した話し方
(7)	振り返り：議論における質問の仕方、回答の仕方(1)
(8)	ディベート：「日本で女性は結婚したら仕事を辞めるべきである」
(9)	振り返り：議論における質問の仕方、回答の仕方(2)
(10)	期末試験（ミニディベート）

授業①においては、互いをよく知るための自己紹介を行った。そして、相手のことを第三者に紹介する活動を行った。その際、相手の素晴らしいところを3点以上紹介できるようにという条件を付けた。必要な情報を引き出す練習の一環である。授業②においては、フォーマルな場における話し方の復習と、図表の基本的な用語、説明の仕方の復習を行った。図表の説明の復習をするのは、「論拠」を述べる際に必要になるからである。授業③においては、ディベート（授業④）の準備として、留学生受け入れのメリット、デメリットを考え、それをもとに「日本は留学生を積極的に受け入れるべき」かどうかを考えた。これが「意見」と「理由・根拠」につながる（例：「受け入れるべきではない。なぜなら、日本人の新卒者の就職が圧迫されるからである」）。ディベートの準備の際には、論拠を探すことを条件とした（例：「〇〇によると、大手コンビニの△△では、昨年度の新規採用者の3割が留学生であった。その戦略を見ると、今後もこの傾向が続くと考えられる」）。一連の情報がレジュメに整理されて表現されていることも求めた。ディベートの後、振り返りを行った。授業⑤では、聞きながら論理を追う聞き手を助けるために、どのような情報をレジュメに載せるべきか考えた。授業⑥では、話者がこれから述べる情報が「意見」「理由」「具体例」等のうちどれに該当するのかを明示するための前置き表現を練習した。授業⑦では、質問の前置き表現を付け、何について聞きたいのか（用語の定義なのか、さらに詳しい内容なのか、論理の関係なのか）を示す、さらに説明を求めたい部分の発言を引用する、質問の個数を明示する等の指導を行った。質問を受ける側も、同様に、どの質問に対して答えているのかを、前置き表現の中で明示するように指導した（授業⑦、⑨）。受講生の様子を見ると、自分のグループの発表内容に対する質問や反論を予想したり、相

手の論理に対する質問や批判を事前に準備していた。また、発表、質問、質問への回答等一連の作業を分担して行っていた。

3.5.3 2011年度における取組と今後の課題

2011年度1学期（2011年4月～2011年7月）では、引き続きディスカッション、ディベート形式の活動を利用しながら、授業を実施した。前年度の受講生の出来や、授業で行った活動の効果などを考慮し、ディベートを実践する回数を1回増やし、特に上記の[1] 高度な論理的思考力・表現力の養成に教育の狙いを定めた。2010年度3学期からの主な変更点は、問題の設定を、「主張する」ということを要請するものから、「(仮定する→相互理解を成立させる→) 主張する」というより高度な技能を要請するものへの変更を試みたことである。具体例を挙げれば、2011年度1学期の授業④では、「『入場お断り』を法的に禁止すべきである」というテーマでディベートを行った。ディベートの前の授業で、店やサービスが人に備わっているある一般的な特徴（例：年齢、人種、性別等）を理由に、個人の利用や入場を断るということを禁止する内容の法律（長所、短所、考えられる影響なども含めて）を、グループ毎に仮定させた。そして、ディベートの際、受講生が自ら考案した新法律を相手チームに提示し、店側、利用者側にとっての長所・短所を説明することで相手チームの理解を促進するように指示した。そのうえで、賛成の立場を主張させた（なお、ディベートを実施する授業では、賛成・反対の立場を入れ替えて、各グループに双方の立場から2回ずつディベートをさせた²¹）。このように、新法律の内容や影響などを受講生に考えさせることによって、上記[1]の論理的思考力の中でも、特に何かを仮定する力と、それを理解する/させる力を伸ばす機会を与えた。また、同表現力に関しても、仮定した法律の特徴を引き立たせながら相手チームに説明し、それに対する相互理解を成立させることによって、難しい話を相手に分かりやすく伝える為の表現力を身に付けさせた。

今後の「J900話す」では、筑波大学が平成25年度から2学期制（15回の授業から成る）へ移行することを見据えて、次の2つの問題の解決に取り組んで行きたい。まず、受講生は、本授業の活動などをおして、より説得力のある議論が組み立てられるようになるという印象を受けたが、自分たちの主張に入り込み過ぎてしまうせいか、他の考え方を考慮しながら議論を展開させることはまだ難しいようである。特に、「このような主張をしたら、相手からこのような反論が来るだろう」、というように、より多角的に議論を考え、相手の議論や反論を先読みする力を身につけさせていきたい。そして2つ目に、「ディベート」という活動そのものは上手くできるようになるが、学生が日常的に参加している活動の中で、「ディベート」で使う技能をそのまま適用することは難しい面があると思われる。非常に明確に意見を述べ合うことに加えて、より繊細な意見の述べ方や、やんわりとした反論・質問の仕方や表現方法なども身に付けさせたい。2学期制になると、シラバスに時

間的余裕が生じ、「ディベート」という基本的な活動形式を拡張し、今までケアできなかったこのような学習者のニーズにも応える内容を盛り込むことが可能になると思われる。

3.5.4 外的基準 (CEFRレベル) との対応付け

「J900話す」の学生の口頭能力を、CEFRを外的基準として示すと、B2.1～C1に該当すると思われる²²。ディベートに先立つディスカッションでは、「いくつかの選択肢の利点と不利な点を挙げて、話題となる問題の視点を説明できる。」(言語活動：産出、カテゴリー：論述する、レベル：B2.1) 受講生がほとんどである。さらに、論拠を用意するように指導すると、受講生は「理路整然と根拠を並べ挙げるができる。」(同B2.1)。その後のディベートにおいては、「適切に要点を強調し、重要な関連のある補足事項を詳しく取り上げて、整然と論拠を展開できる。」(同B2.2)受講生もいる。2011年度1学期の様子から見ると、自らが考案した法律という、他者にとっては馴染みの極めて薄い話題について、主張を展開し理解を求めている。これは、「複雑な話題について、明瞭かつ詳細な記述やプレゼンテーションができる。下位テーマをまとめたり、一定の要点を展開しながら、適当な結論に持っていくことができる。」(言語活動：産出、カテゴリー：話すこと全般、レベル：C1) や、「複雑な描写をしたり、複雑な話をすることもでき、下位テーマを統合させながら、特定の点を発展させたり、適切な結論でまとめることができる。」(言語活動、語用能力、カテゴリー：話題の展開、レベル：C1)に該当すると考えられる。意味や論理の整合性の面で理解に問題が起きた際には、説明を求めることができる。これは、「誰かが言ったことの意味を明らかにするよう、詳しい説明を人に求めることができる。」(言語活動：やりとり、カテゴリー：説明を求める、レベル：B1) に該当する。さらに、分からなかった箇所やどのように分からなかったのかを明示するよう指導すると、大半の受講生は容易に「相手の発話を正しく理解したかどうかを確認するための質問ができ、曖昧な点の説明を求めることができる。」(同B2)²³。

これらのことから、「J900話す」の学生の口頭能力は、CEFRにおけるB2.1～C1に該当すると考えられる。

4. 今後の課題

以上、筑波大学留学生センター日本語教育スタンダード「話す」の構築に向けて、現在の各レベルの授業を概観した。現在に至るまで、授業の内容についてのレベル間での相談が持たれている。隣接するレベルの担当教師間での話し合いや、各レベルの担当教師が集まり到達目標としていることをKJ法 (川喜多 1967) よって把握する等の作業である。しかしながら、全てのレベルにおいて同様の観点からの統一した調整は未だ行われていない。今後、教師側については、各レベルでの実践を洗い出し、目的や方法論を検証しつつ、最

終レベルの到達目標を明示して、レベル間の調整を行うことが必要である。一方で、受講生が実際の知的活動としてどのようなことを行っているのかという実態把握及びそのための調査も必要である。また、レベル間の調整の結果が現実に適用可能かどうかを確認するためには、各レベルの受講生の様子についても担当教師全員で確認していくことが必要であろう。受講生の様子を把握する試みとしては、2011年度1学期においては、一部の教師が担当するレベルを前年度から1レベル降りるということがあった（例：900（2010年度）→800（2011年度））。そのことによって、レベル間の学生の能力差や課題がより鮮明に見えてくるということがあった。このような担当の変更も、連携を促進する上での一案である。また、各レベルの到達目標を外的基準と対応付けるにあたっては、より精緻な方法で行っていく予定である。

注

- 1 第二筆者以下は、「話す」クラスの担当レベルの数字の若い順に並んでいる。
- 2 ただし、現状では、後述するように、500レベルにおいては日常的なやりとりへの配慮もある。
- 3 「～できる」という形で表される「言語使用者が典型的にどのような言語活動ができるのか」という記述（杉本 2006）のことである。
- 4 各レベルのCan-do statementは、500レベルは小林・ボイクマンが、600・700レベルは杉浦が、それぞれ考案した教材に基づいて記述した。900レベルは、2009年度までの最上級である700レベルでの取り組みに基づいて関崎博紀が記述し、800レベルは、それと2010年度からの700レベルとの間にあるべき活動を勘案して関崎友愛が記述した。これらのCan-do statement に含まれる文言は、関崎・酒井（2011）において記述されたCan-do statementに取り入れられている。
- 5 <http://www.actfl.org/i4a/pages/index.cfm?pageid=4236>参照（2011年10月5日確認）
- 6 <http://www.alte.org/framework/index.php>参照（2011年10月5日確認）
- 7 <http://www.tufs.ac.jp/common/jlc/jlc-gp/jp/2100.html>参照（2011年9月8日確認）
- 8 <http://jfstandard.jp/cando/top/ja/render.do>
- 9 『JLC日本語スタンダードズ 2009改訂版』を参照した。
- 10 機能会話については（ボイクマン他、2006）を参照し、筑波大学の留学生の状況に応じた内容に修正した。
- 11 杉浦千里（2012）参照。
- 12 杉浦千里『日本語で発信』自主作成教材
- 13 杉浦千里『日本語で発信』自主作成教材
- 14 『日本語で発信』J600使用教材

- 15 『日本語で発信』 J600使用教材
- 16 『日本語で発信』 J700使用教材
- 17 『日本語で発信』 J700使用教材のインタビュー宿題のテーマ
- 18 『日本語で発信』 J700使用教材
- 19 『日本語で発信』 の巻末資料3、4
- 20 1学期は関崎友愛が担当した。現在筑波大を退職しているため、記事は私信によって合意の上で記述した。
- 21 このやり方については、2006年4月7日から2010年8月27日まで日本テレビで放送された「太田光の私が総理大臣になったら...秘書田中」という番組を参考にした。当番組では、「小さな国会」というイメージで、番組のメンバーが日本の様々な社会問題の解決案として掲げる架空のマニフェストに対して、賛成・反対などの立場で討論を繰り広げる。
- 22 比較的広いレベル相当と判断されたのは、「J900話す」が「話す」コースの最上級であることが影響していると考え。すなわち、「J800話す」を修了して進級してきた学生と、新規に来日してこれより上のレベルのクラスがないために「J900話す」に配置された学生が同居していることによると考える。
- 23 この記述文はB2レベルだが、同カテゴリーにおける最も高いレベルである。

参考文献

- 川喜田二郎 (1967) 『発想法—創造性開発のために—』 中公新書136
- 国際交流基金 (2009) 『JF日本語教育スタンダード試行版』 独立行政法人国際交流基金
- 国際交流基金 (2010) 『JF日本語教育スタンダード2010』 独立行政法人国際交流基金
- 杉浦千里 (2012) 「中級学習者の話す力を伸ばす授業設計および教材開発 -「話す600・700」の実践報告-」 『筑波大学留学生センター日本語教育論集』 第27号：229-246
- 杉本明子 (2006) 「ヨーロッパの言語テストの共通枠組み—ALTE Framework—」 国立国語研究所 (編) 『世界の言語テスト』 くろしお出版：25-39
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター (2009) 『JLC日本語スタンダード2009改訂版』
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター (2011) 『JLC日本語スタンダード2011改訂版』
- ボイクマン総子・小室リー郁子・宮谷敦美 (2006) 『聞いて覚える話し方 日本語生中継 初中級編1, 2』 くろしお出版
- Council of Europe (2001) *Common European Framework of Reference of Languages: Learning, Teaching, Assessment*. Cambridge: Cambridge University Press (吉島茂・大橋理枝訳2004 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』 朝日出版社)